

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

夢のつづき

里見 吉佑

現在三十歳、職員の採用活動に関わっていると実感するが、学生からするともうすっかりおじさんの仲間入りである。かといって、まだまだ諸先輩方に比べると人生経験も少なく、社会人としては一番中途半端な年代なのかもしれない。

第105号
食卓が凍り付いていた。その中で母は毎日たんとと祖父と祖母そして三人の子供の世話をしていた。

啓
と、遊ぶことが大好きで、小学校はサッカー、中高はバレーボールに打ち込みどれも弱小チームながら、それなりに充実した日々を過ごした。

機関紙

大学に入ると東京で一人暮らしを始めた。いろんなサークルに顔を出しながら、大学の外でも社会人サークルを立ち上げ、やりたいこと全てに手を出していたように思う。住んでいた場所が大学から近く、仲間も集まりやすかったのでも、何かやりたいことが見つかるのと仲間を集め『大学時代で遊びと名のつくものはやりつくした』と断言できるほどとにかくいろいろなことをした。ただその犠牲として、講義を受ける時間は学年が上がるごとに少なくなっていく、実習に行くための単位が足りず、資格が取れなくなってしまう。両親からそれぞれ個別に怒られたことはいまだに覚えている。



この仕事に就こうと思ったきっかけは二つの単純な理由だ。一つ

は父親の仕事に興味があったから。いつも、子供ながらに仕事楽しい？と聞くと、「仕事なんか辛いだけだ」と言いながら、毎日意気揚々と出ていく父の姿を見てどんな仕事なのか興味があった。二つ目は古い家だったので祖父や祖母から長男は後を継ぐものだとして自然と刷り込まれていた。大学進学の際も特に他に興味があるものもなかった。講義で学べば学ぼう、父が仕事にしている分野とは思えなかった。そして自分に向いているとも思えなかった。同級生と一緒にボランティアに行こうと言われても、その時間があつたらバイトをするか、遊びたいと断っていた。今思い返すと同級生には、こいつはなんで福祉学科にいるのだと思われていたかもしれない。ただ、そんなボランティアを一生懸命やっていた同級生は地元に戻り市役所の公務員になったり、一般企業に就職したり、実際に福祉の現場を仕事にした人間はほとんどいなかった。反対に自分は夏休みに小石川福祉作業所でアルバイトをさせてもらって、この仕事がおもしろいと感じた。今考えると、当時の施設長、先輩職員の多大な配慮によってそう感じさせてもらった部分があるように思うが……

小石川でアルバイトをしてはじめて、『知的障害者』を意識した。それまでも障害者の方と接するとはあったのだが、父が家に連れて来たり、お祭りに遊びに行ったり、ソフトボールをしたり、何も意識せずに接してきた。私からするとよく遊んでくれた近所の兄ちゃんだったし、同級生にも軽度の知的障害をもつ仲間もいたが、『ち

よつと変わったおかしなやつ』程度の認識だった。ただ、講義で聞いていた知的障害者は今まで接してきたそうだった人とはどうして結びつかず、どこか頭の中で区別していた。それが、いざアルバイトとしての仕事が始まり責任を伴うと、今まで普通に接してきた人たちが急に自分の中で『知的障害者』という特別な人になってしまい、半分寝ながら講義で聞いていた禁止事項ばかりが出てきて、積極的にかかわることが怖くなった。時間の経過とともに利用者と関係が取れてくると、そんなことは意識しなくなったが、当時の私のように生半可な福祉を学んだ人間が一番障害者を差別しているのではないかと考えさせられた。学生時代の感性では、やはりインパクトのある『人権侵害』『虐待』『差別』といった言葉だけが頭に残ってしまい、関わるのと遠ざかってしまう。こんな学生は当時の私だけでなく少なからずいるのではないかと思う。事実、私より優しい心と高い志を持った同級生たちが『ボランティアならいいが仕事にするのはやっぱり違う。』とほとんどが福祉の現場を選

択しなかった。



大学の講義内容だけでなく、業界全体でネガティブなイメージが先行してしまっていることが現在

の人材不足の一つの要因になっているように思う。

人の人生に関わる仕事だからこそ生まれるやりがいや、楽しさを伝えていかなければ、ただ負担やリスクのみがクローズアップされてしまう。しかしながら、地味に地道に目の前の仕事に取り組んできた社会福祉法人にとってそういった『見せ方』は苦手分野であり、一般企業にとって当たり前の広報戦略や採用戦略が標準化されていないところが多い。実際、待遇や福利厚生は他の中小企業の平均と比べた時に上回っている法人も多い。そういった事実や仕事の魅力を学生にわかりやすく伝えていくことが必要だ。良いものを作り上げてそれを伝える人間がいなくてはならない。



一昨年から学生時代勉強してこなかったことを取り戻そうと、働

きながら大学院に通わせていた。知識を増やすことも楽しかったが、自分がいる法人が外から見たらどんな風に見えるのか知りたかった。中にいるとあまり気づかなかつたが、知的障害分野のみでこの規模の法人は全国的にも珍しいらしく、講義ではよく質問攻めにあつた。また事業所間の連携や、昭和の企業のような職員の福利厚生も逆に新しいようで院生の興味を引いていた。ここでは様々な分野の講義を受けたが、一番身についたのは、自らの福祉観

や自らの所属する組織を客観的にどう見るかということ。中にいたらあまり気づかない佑啓会の魅力や強みに気づかされた。そして、何かを伝えるためにはまず自分が誰よりもそのことについて知らないといけないと実感させられた。



自分の立場をよく周りからは、『二代目だから大変だね』とか『辛いでしょ』、口の悪い友人からは『敷かれたレールの上を走っていておもしろいか?』と言われる。たくさんの人と一緒に走ってもらっているのにこんなにおもしろいことはない。だから答えは『大変だけどその分おもしろい』だ。それに走りがいのあるレールだ。保守も必要だし、時が来れば交換もしなければならぬ。なにも古いレールの上だけとは限らない。新しい街づくりも鉄道会社の線路からはじまることだってある。

一般企業とのイコールフットイング論が叫ばれる中、社会福祉法人にとってはこれから逆風の時代に入っていく。そのおわりが利用者さんやご家族にわからないよう、組織として変化に柔軟に対応しなければならぬ。そのためにも終点は作らない。大変なことばかりは作っているが新たなレールの敷設もしたい。誰を乗せどこへ向かうかを考える。みんなと同じ「夢」をみたい。

(佑啓会 常務理事)

我が家の 冒険活劇

野崎 忠夫



幼少者や障がい者など弱者への虐待事件の報道を見ると大変心が痛む。近隣や他人を思いやる日本の良き文化は薄れ、交流は希薄化し、問題を他人へ押し付けて軋轢が生まれ、その結果として弱者へのしわ寄せが高まるのではないかと心配である。

私のように会社員の場合、成果主義や休日の変則化など仕事環境は大きく変貌し、サービス事業者への依存心は高まり、利用できて当然と思うことも多いのではないかと。一方事業者側は、増加する利用希望者に何とか応えるべく必死に努力されているが、需給バランスは崩れており、要望に沿えないことが多いと思う。

次男の学校入学と同時に「おやじの会」で障がいを持つ児童・生徒の支援活動に参加して来たが、自らが障がい者となり支援団体を立ち上げ長年功労された大先輩の言葉が心に残っている。「障がい者だから何でもして貰えると思うのではなく、自らできる範囲はやらないとダメなんだよ！」。日頃この言葉を意識しているが、果たして親としてできているのだろうか。

さて、我が家の次男は今年の6月に二十歳を迎えた。これまでの日々は家庭内で繰り広げられたスリリングな「冒険活劇」である。



【創世編】

その日、母親が卒業した小学校のジャングリズムの天辺で長男と青空を仰いでいたが、病院から呼び出され直ぐに次男は生まれた。スリリングな日常はここから始まるのである。強い新生児黄疸でウルトラマンのようなアイマスクを付けて光線療法を受けていた。無事退院するも数か月して風邪をひき、ある朝母親が体が冷えていることに気づき慌てて掛け付けの小児科を受診したが、聴診器を当てて「特に異常はない」との診断。食って掛かり胸部レントゲンを撮ったところ何と肺炎。「自信過剰のお前は何を診ていたんだ」と怒り心頭のまま、直ぐに紹介状を持ちこども病院を受診。まるでERドラマのように専門医たちが小さな体を取り囲み、下された診断は強度の低酸素飽和度状態で、いつ意識がなくなっても不思議ではなく、そのまま長期入院となった。この1年後に専門医により障がい特定され、18年に渡り通院や入院退院を繰り返すことになる。

【成長編】

専門医より養育のため保育園の登園を進められ、私立保育園に入園し、最終的に市の保育園まで2回転園した。特別支援学校に入ると持ち前の明るさが顕著となり、現在のキャラクターの母体形成されたと思う。明るく人と慣れ親しむことを好み、虫や動物が大好き。成長と共に一人の時間も欲しい一方で孤独な存在を嫌うというチョー面倒な一面も出てきた。慢性化した中耳炎の影響で鼓膜は穿孔したままとなり、ちよつとの風邪で悪化するため、母親には病院通いの負担が大きいのしかかつて



(ふる里学舎あすみが丘 利用者父)

いたが、2度の自己組織移植による鼓膜形成手術で見事に塞がり、これを機に諸症状も劇的に改善され、18年に渡る通院にピリオドが打たれた。その一方で、障がいのため睡眠が浅く、早起きすると携帯やゲーム機を高音で遊ぶため、私の健康管理は限界となり、高血圧の薬を飲み始め、最近是人間ドックの聴力検査の「ピー」が聞こえなくなってきた。

【成熟編】

卒業後はデイサービスでお世話になっているが、12年の学校生活時の利用とは異なる環境や仲間となり、生活リズムや食事も成人ベイスとなり、当初は調子が狂っていたようだ。腹は出てきて、眠たい時や腹が減った時はチョー不機嫌になる所など、まさに己を見ているようで時折イヤになるが、生命の遺伝の凄さを感じさせられるものである。

この20年、間違いなく健常者の家庭より遥かに多くの様々な出来事があり、心身共に疲れて数え切れないほどウザい！と思つたが、今改めて振り返ると映画の一場面の様な思い出となつている。きつとこれから我が家では、脚本のないスリリングな冒険活劇が日常的に繰り広げられることだろう。

夏だ！海だ！地引き網ツアーだ！

8月3日、当日は天候にも恵まれ160名の参加がありました。場所は例年どおり九十九里、家族参加型の行事で、年々参加者数も増え人気行事の一つです。大漁の魚とスイカ割り、宝探し、流しそうめん等、その中でも毎年皆さんが楽しみにしているメインイベント「マグロ解体ショー」！ではなくカツオでした。でも、こども達にはみんな目を輝かせていました。

最後には、アンパンマンが登場し、会場を盛り上げてくれました。今年もみんなの笑顔から夏の思い出が一つ出来たかなと思います。

(実行委員 そよかぜキッズ 圓山祐生)

前回の佑啓では「仕事も遊びも全力！」がモットーの佑啓会での部活動を紹介致しましたが、年間を通して様々な福利厚生事業があり、職員も日々楽しんでおります。今回はその一つである地引き網ツアーをご紹介します。



今年も魚は大豊漁！
活きが良くてビチビチでした



大迫力の鯉解体！
子ども達の目も釘づけでした



里見理事長
ご家族と
アンパンマン
(?)を囲んで



はじける笑顔！夏の思い出に
なること間違いなし！？



職員お手製の流しそうめん
お味はいかがでしょう？

<編集後記>

猛暑を通り越して酷暑とも呼ばれた今年の夏。連日暑い日が続きました。特にスポーツはサッカーのワールドカップから甲子園、アジア大会と連日の熱戦にパワーと感動をたくさん頂きました。私もこれから秋を目いっぱい駆け抜けたいと思います。皆様にとって実りの多い秋になりますよう祈念し佑啓105号をお送り致します。 越川 直人